
ドS大学生と腐女子OLの結婚日記

上原七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DS 大学生と腐女子OLの結婚日記

【Nコード】

N5958S

【作者名】

上原七海

【あらすじ】

水口可奈子（27才、腐女子、OL）は、出会ったばかりの大学生・藤城宏明（22才）からプロポーズ（？）される。しかし、そこには藤城のとんでもない企みが隠されていた……！ドタバタな二人の結婚生活が今始まる

出会いは突然に

私、水口可奈子（27才、独身、OL）は、いわゆる腐女子である。高校生の頃、友達に借りたBL…それから私の人生は変わった。まさに薔薇色の人生が始まったのだ。

中学、高校と女子校で、しかも進学先は女子大。あまりに男っけがない人生だが、かといって周りの女の子の子した連中にはついていけない。

服は基本ジーンズで、髪は短くしていた。合コンなんてもつての他で、誘われても一度も行ったことはない。

中学・高校・大学と、ゆる〜くハンドボールをしたり、漫画喫茶で好みのアレを読み漁った。これが私の青春だ。

今痛い…と思ったそのアナタ！！

まったくもって悔いはない！！私は、根っからのポジティブシンキングだからだ。

大学を卒業し、行きたかった新聞社に入社できた。そこそこ成績はいいのだ。それに小学生の頃は、アメリカにいて帰国子女というやつでして、英語がペラペラ。まったく就活に不便はしなかった。

入社して5年になる。未だにアレはやめられない。ましてやめる気など更々ない。

ここ最近では、読むに飽き足りて同人誌まで書き出した。なかなかの評判で、その業界では「神」と言うやつもいる。自分の才能がこわいとはこのことだ。

まあ最近厄介なのが、実家の両親が、早く結婚しろやなんやかんや言い出したことだ。私には妹が二人いて、彼らには先をこされてしまい姪っ子甥っ子合わせて三人もいるのだから仕方がない。

私にだって彼氏がいたことぐらいある（一回だけだけど）。

会社の同僚で、まあ見た目は普通だけど中々優しい人だった。

しかし、交際が会社にばれ、彼は海外に飛ばされてしまう。まあしばらく遠距離恋愛が続いた…と言いたいが、2週間で自然消滅した。付き合ってたあたりたってたし、そんなもんだろうと思った24才の冬だった。

しかし、私には『読書』と同人誌の作成という大仕事があるので、取り立てて問題なかったし、彼にバレるのではとヒヤヒヤしなくすすむようになった。

まあ、普段は友達と騒いだり、一人の時間を楽しんだりしているが、時々精神不安定になる（女ならみんなそうだろう！）。

その時は、近所のやぶ医者こと黒髭の黒ちゃんという怪しいオッサンにひたすら愚痴る。

オッサンは、医者のかせにあんまり人の話を聞かない。しかし要所

要所で相づちを打ったり、ハンカチをくれたりする。

一通り愚痴り泣き叫ぶと私はすっきりして、黒ちゃんに鼻水と涙に濡れたハンカチを返し、颯爽と立ち去るのだ。

私が腐女子だということは、『仲間』しか知らない。

あまり人の評判を気にするような性格ではないが、まあ別にわざわざいうのもなっ、て感じで結果的に隠している。

特に会社の人にはバレたくない。

BL好きな女の子はいっぱいいるし、本屋にはそれ専用のコーナーまであって、日本経済に貢献していることがわかる。

何も隠す必要はないが…

やっぱりちょっと、恥ずかしい。

別に悪いことをしているわけではない。男子がエロ本を買ってるのを見られるのが嫌なのと似てると思ってくれたらいいだろう。まあ、皆はどうか知らないけど私の場合ね。

ということで、今日の私はサングラスに、マスクをしスッポリ身体が隠れる普段はあまり着ないベージュのコートを着ている。ロングヘアをまとめて帽子までかぶっている。怪しいが…仕方がない！

今日は、大好きな『メロメロ・僕らは騎士団』（もちろんBL）の発売日なのだ！！

会社が終わわり、早速私は、新宿の駅近くにある。×書店へ直行した。

（ああ、早く早くっ）

階段をかけ上がり、例のコーナーへ向かう。

（おお！あつたあつたあゝやつぽゝ）

私は、周りの知り合いがいないことを確認する。

そして、誰もいないことを確認するとさっと一冊持ちレジに向かった。

カモフラージュと言うわけではないが、普通の雑誌も一冊もっていった。

レジを済ませ私はホクホクする気持ちで書店を後にした。

（わーいっ、早くお家に帰ろうー）

スキップしながら、地下鉄に向かう。嬉しいことがあると景色まで輝いて見える。鼻歌なんて歌っちゃおうかな。

信号がちょうど青になった。

（渡っちゃおうー）

と思い、歩を速めたその時ー

ドンッ

「きゃっ！」

私は、横から来た人とぶつかってしまった。

（いたたー）

相手は背の高い男性で、私はよろめいて転んでしまった。

男性はびっくりしたのか、私を見下ろしている。

「あ、大丈夫？」

私はその言葉に少しイラッとした。その言い方が、あまりに他人事だったからだ。声が若く子供っぽかったから尚更ムカついた。

「あのねえ、確かに私も周りを確認しなかったの悪いよ。でも、一応、女性を転けさせたんだからさあ、その言い方ないんじゃない。」

私は立ち上がりながら、彼に向かっていった。

立ち上がる時に気がついたけど、私の荷物は、バックも名刺も散らばっていた。

「あ…」

そして、さっき買った「アレ」も…

ぶつかった男をちょうど目に捕らえた時。彼は私の言葉などお構い

無しに、私の大切な『メロメロ』を拾いあげていた…

そして…彼と目があつた…

私は、大切な秘密を見られた思いで赤面していたが…

彼の顔をみて更に赤面した。

（な、なんてイケメンなんだ…！）

彼のイケメンぶりに一瞬私は夢見心地だった。

しかし、彼は天使のような甘いマスクとは裏腹に私を地獄に叩き落とす。

彼の美しい口元が、酷く歪み冷酷な微笑をたたえた。

一瞬ゾクツとした次の瞬間―

「あんた腐女子なんだ」

男は、悪魔のような邪悪な冷笑を浮かべ、へたりこむ私を見下ろしていた。

微笑みをもう一度…

ただならぬ気配を感じ、私の本能がヤツは危険だと告げた。

私は彼に飛びかかり、「返せいつ」と大事な大事な宝を取り返し、散らばった荷物をかき集めた。

猛烈にダッシュし信号が赤に変わる前に信号を渡りきった。そのまま一目散に地下鉄まで走り、電車に乗り込んだ。

「ふうっ」

安堵の息をつく。

（なんなんだアイツは）

やっと息が落ち着いたところに最寄り駅に着いた。まあ、よくわかんないヤツだったがこんなこともあるか、と気持ちを切り替えそそくさと家路を急いだ。

（まあ、感じ悪いヤツだったがカッコよかったな…）

私は、不覚にもそんなことを思ってしまった、おいきり首をふるのだった。

しかし、まだその時は知らなかった。私が大いなるミスをしたことを…そして、そのミスが私の人生を変えることを…

数週間後

今朝は、あまりの苛立ちにけたたましい目覚ましを投げ飛ばした。
…三時間しか寝ていない。

ここ数日は、私は仕事漬けでまったく癒しの時間が持てていない。
そのせいで、同人誌の原稿も遅れているし、読みたい漫画（もちろんBL）もたまっている。

私の職場は、新聞社だし普段もかなり忙しい。だが、ここ数日は拍車がかかっている。

今日から2週間インターンでやってくる大学生の、教育係にさせられてしまったからだ。

そんな雑務は、新人にやらせてくれーと上司に詰め寄った。

しかし、何でも有名大学のエリートが多く、社としても優秀な人材を確保したいので、採用も視野にいれた本格的な研修がしたいとのことだった。

断ることもできず、私は自分の仕事を早めに片付けねばならなくなり、無理なスケジュールを組んでいた。

（くそう…欲求…不満…漫画が読みたい…）

眠さより漫画が読めないことを悲しむ私に関心しながら、自分の身体に鞭打って引きずるように出社した。

出社してしばらくすると、アシスタントの新人社員・小出君に案内されてエクスターン生達が、やってきた。

上司と他の国際部のメンバーの前に、若い顔が一行に並ぶ。私も上司の横に立った。

（やっぱり若いなあー、20人っていったよね…）

私は、全員の顔を順番にざっと見ようと視線を動かしたが…

（げっ！！！！！）

なんと、あの感じの悪い悪魔野郎が一番端に立っているではないか
！！！！！！！

（な、なんでアイツがつっつ）

私は、あまりのことに声が出ない。あたふたとする私は、彼から目が離せない。

（ど、どうする、私??）

私は彼を凝視する。しかし、彼は一向にこちらを見ない。

（あれ、もしかして気づいてない?）

あの日は、暗かったし一瞬だったから気づいてない可能性が高い！

このまま知らぬふりをして乗りきろう！と心に決めた瞬間…

ぱっ、とヤツと目があった。

そして、何を思ったか近寄ってくる。

「あれ？水口さんじゃないですか、お久しぶりです。」

彼は屈託のない笑顔を見せる。あの悪魔のような笑みが嘘のようだ。

「おつ、水口君、知り合いかね？」

戸惑う私に上司が尋ね、皆の視線が私に集中する。

「え、あ…」

私は咄嗟のことで上手く答えられない。

「はい。昔、英語の家庭教師をしていただいていたんです。」

「があっ！」

私は、あまりのことに変な声が出てしまった。何を言っているんだ、コイツは。

「そうだったのか。よかったな、君達インターン生の担当はちょうど彼女なんだよ。」

上司は何の疑いもなく、よかったなと私にも言うてくる。

「そうなんですか。水口さんにまた教えてもらえるなんて光栄です。水口さんはとても読書家で…今も読んでるんですか？B…」

ぐあっ！とかホギヤッ！とか、訳のわからないことを口にしながら焦って彼を上司達から引き離れた。

「ちょっと！何言おうとしてんのよっっ」

私は上司達に聞こえない細心の注意をはらいながらコソコソ声で彼に詰め寄った。

すると、また凍りつくような微笑を浮かべ、彼は耳元につぶやいた。

「黙っててほしけりゃ、まず昼飯でも奢れよ」

…というわけで、私は彼と昼食と一緒に食べている。もちろん、私の奢りだが、今日で5日目になる。

（毎日かよーっ！）

と泣きたくなるが仕方がない。あと少しの辛抱だ。

彼は、初日二人になると、「あの時の落しものです。」と私の名刺入れを差し出した。

（ヤツは、これで私の名前と会社を知ったのか…？）

不信に思いつつもこの5日間、昼飯を毎日一緒に食べている。

しかし、彼は態度も丁寧で、普通のインターン生のように色々と仕

事について質問してくる。初めは何を企んでるんだと身構えていた私は、無邪気に研修をしている彼の様子に正直拍子抜けした。

（な、なんだ、コイツがここにいるのは偶然だったのか。）

彼は、藤城宏明（22才）。現役のT大学の三年生だ。国際学を研究しているようで、もちろん英語は完璧。更に、中国語とフランス語も話せるらしい。大学では、サークルを作り起業し一応社長という肩書きも持っている。

その上、1日で社内中の話題になるぐらいのイケメンだ。色白で、軽くワックスで固めただけのラフなヘアスタイルが爽やかで嫌味がない。

身長も高く185センチくらいあるだろう。スラッとしているが細すぎず、大学ではテニスもしているという。丸く可愛い目だが、高い鼻と薄い綺麗な唇が彼の顔を男らしくしている。

話し方も声も、人を惹き付ける。しかし、自分がイケメンであるとか秀才さを誇る所がなく、話題が豊富なのに聞き上手だ。研修のことも良く理解し、他の研修生より抜きん出ている。

少しずつ私も警戒心がとれ、彼はそんな悪い人じゃないし、真面目な良い学生じゃないかと思いついた。

彼も、そんな私の変化に気付いたのか、色々とプライベートな質問をしてくるようになった。

兄弟いるんですか？とか、大学どこですか？とか、出身どこですか？とか当たり障りのないものだ。

私は、その頃には彼にすっかり心を許していたので、ちゃんと答えた。

（取り越し苦労だったな）

疑って申し訳ないなとも思い始めていた。そして、私も彼に軽い気持ちで質問した。

「藤城君は、何で我社に来たの？将来、マスコミに入りたいの？」

一瞬彼は目を丸くして私を見た。そして、何か考えるように手で口を塞ぎ斜め下を向いてしまった。

（あ、あれ？私、何か変なこといった？）

不安になった私は、彼を覗きこんだ。すると、彼は小刻みに震えている。

（え、泣いてる…？）

彼は、しばらく下を向いたままだ。何か不味いことを言ってしまったのだったらどうしよと彼が心配になった。

急に彼は、顔をあげた。

「…入りませんよ」

彼を見てまたゾクツとした。またあの悪魔のような笑みを浮かべていたからだ。

（わ、笑ってたのか…??）

「あんた本当お人好しだな。会社にもマスコミにも、全く興味ねーよ」

いきなり化けの皮を剥がした悪魔を前に私は、ぶるぶる震えてるしかない。

「名刺見たって言っただろ？脅されて飯まで奢らされて、ちょっと真面目にしたらすっかり忘れやがって」

「え、え、え、じゃ、じゃあ何で…？」

男は、冷笑を浮かべ私を見た。

「俺、プライド高いんだ。あんた俺を公然と叱りつけただろ？あれが許せないから仕返ししに来たんだ」

ガーン！！！！

（ヤバい、やっぱりコイツはヤバい、だ、誰か…け、警察…）

あまりのことに、腰を抜かし椅子から転げ落ちた。私達は、外のテラスにいた。周りにはお客さんがいなかったから良かった…と思っただが、いや違う！助けを求めなきゃと周りを見回した。

すると泣きそうになりながら、キョロキョロとする私に、手がさしのべられた。

「大丈夫ですー」

悪魔は、こちらに来ようとした店員を笑顔で軽くあしらい、私の手を引いて優しくて席に座らせた。

「助けを呼ぼうとしても無駄だ。」

しかし、優しい動作とは裏腹に悪魔は私の耳元につぶやいた。

（ヤバい、殺されるー！ひー）

パニックになった私は、咄嗟に謝るしかないと思った。

「す、すみませんっ！ごめんなさいっ、許してー、い、命だ、だけわ…」

「嫌だ」

（く、即答かよ…）

無表情の彼の顔をうかがいながら途方にくれた。重たい沈黙が流れた…

こんな危ないヤツに絡まれたことなんてない。平和な人生を送ってきた私にはありえない。いよいよパニックになり、どんな仕返しをされるのか考えると悲しくなってきた。熱を帯びた目に涙がたまっているのを感じた。その時…

「なーんてね。嘘です、嘘。すみません、からかつちゃって」

彼は、天使のような温かい笑顔を見せる。

（う、うそ…）

私は頭が真っ白だが、彼の笑顔を見ると自分は窮地を脱したと分かり生き返った気持ちで、ホッとした。

「そんな本気で信じないでくださいよ。そんな下らないことで、わざわざエクスターン生になって仕返しに来るヤツなんていませんよ。」

彼は、笑ってる…私も、つられて、アハハ、そうだね、一本とられたなあと言っちゃってる…

しかし、やっぱりコイツは危険だ…本能がそう告げる…

（なんとか、理由を作って明日からは昼食は行かないことにしよう…、こ、コイツ怖い…、けど助かって良かったああ…）

私は、どっと疲れてヘラヘラしながらもテーブルにへたりこむ。

（ああ、早くこんな研修終わって家でゆっくり漫画読みたいお…）

「僕が、研修に来た本当の理由は…」

男は淡々と話し出した。

（ほ、本当の理由…？）

疲れすぎて、私の耳には彼の言葉がどこか遠くに聞こえる…

（最近、仕事も多くて昨日もあんまり寝てないんだよな…）

そんなことを考えていたが、次の彼の言葉に再び現実に取り戻される…

「僕と結婚してくれませんか？」

彼は、あの悪魔のような微笑みを浮かべていた…

悪魔の求婚

私は、今日起こった人生初の出来事をきっかけに、日記をつけようと決めた。

そこで、奴との出会いから今日の悪魔的なプロポーズまで記した。なぜ悪魔的かというと……

そこまで書くと、可奈子は深いため息をついた。彼女は今自宅のソファで、今日買ったばかりの日記をしたためていた。

そして、藤城の昼間のプロポーズを思い出していた。

「僕と結婚してくれませんか？」

この台詞に憧れを抱かない女性はいない。今まで、自分の趣味に夢中で、恋愛にも縁がなかった可奈子でもそうだ。

藤城のような素晴らしい容姿と能力をもった魅力的な男性にこんなことを言われれば…可奈子だって、全くときめかなかった訳ではない。

しかし、その後の藤城の台詞はそんな女心を踏みにじるには十分だった…

「二年間でいいんだ。そうしたら離婚してくれていい。金も払う」

急によくわからない展開になって、可奈子は混乱していた。

恐ろしい存在だった藤城に、急に子供の頃から憧れていた愛の言葉を告げられ、即時に怪しい話になってきた。

「な、なに言ってるの？意味がわかんないっ！会ったばかりだし…目的はなんなの？」

あわてふためく可奈子を見て、藤城は、次は優しく微笑む。

「僕には親が勝手に決めた婚約者がいるんだが、彼女とは結婚したくない。しかし、まだ学生の身分で親に刃向かうのは些か面倒だ…」

藤城は、長くしなやかな指でうつとうしそくに髪をかきあげた。

「そ、それと私がどういう関係が…」

可奈子は話が見えず、口をひらいた。

「だから、先に結婚するんだ。流石にそうなったら親は何も言わないだろう？」

藤城は、につこり可奈子に微笑んだ。この笑顔に、くらつとこない女はいないだろうと、可奈子は思ったが…

（な、なにその訳のわかんない話、絶対おかしいっ）

「そ、そんなことしたら結局逆らってるじゃない！そんな話、おかしいよっ！」

大人しくしていた可奈子が、急に反論してきて藤城は幾分目を丸くした。しかし、彼はそのぐらいの反論は想定範囲だ…

彼は、少し悲しそうに微笑む。可奈子は、一瞬心が傷んだ。魅力的すぎる…

（うっ、いかんいかんっ！騙されるな可奈子！）

「婚約の契約書には、お互いに社会人になるまでに結婚相手がいないければ、という除外事由がついている。流石に子供の時の契約だからね。婚約が成立しない除外事由があるんだ。」

藤城は、椅子にもたれかかって腕をくみ遠くを眺めている。そのキラキラした瞳は、憂いをおびていた。

「全く何のための契約やら…下らない契約だろ？」

藤城は、可奈子の目を見つめ、困ったような表情で苦笑した。

しばらく、二人のテーブルは沈黙が流れた…

藤城が何か言おうとしたとき、可奈子が口を開いた。

「確かに大変そうだけど、私には関係ないわっ！」

可奈子は、面倒に巻き込まれたくないと思死だ。話もやはり納得できないし、まして会ったばかりだ。今まで気づきあげた生活が、訳のわからないことで変わるの嫌だし、意味不明な理由でバツイチになる必要はない。

（そ、そうだ私には何のメリットもないっ！）

可奈子は、必死に考えるまま藤城に訴えた。

そして、必死に自分に言い聞かせた。

…こんなに可奈子が必死なのは、藤城の魅力にどこか惹かれている自分がいるからだ、ということに、彼女自身気づいていなかった。

藤城は、黙って可奈子の話を聞いていた。可奈子は一通り話終えたが、あまりのことで息が上がっている。

（…わ、わかってくれた？ な、なんか言つてよ）

沈黙が流れた…しかし、急に藤城が立ち上がった。

その顔にはあの悪魔のような笑みが浮かんでいた。

そして、おもむろに可奈子に近づき、可奈子の腕を掴んだ…

「きゃっ！」

可奈子は、声をあげるが…

運命は扉をたたく

吸い込まれるようにキラキラ美しい二つの眼差しが、可奈子の目の前にあった。

「…おはよう、可奈子」

「……………」

男は朝日を浴びたベッドの中で、眩しそうに可奈子に微笑む。

可奈子は、顔が真っ赤になってもう一度布団をかぶった。

この男とは、もちろん可奈子の夫・藤城宏明である。

二人は結婚初夜をあかし、目を覚ました。

数カ月前

プロポーズをし、断る可奈子の腕を強引に藤城は掴んだ。

「きゃっ、何すんの…」

藤城はいきなり可奈子の頬にふれ、可奈子を見つめた。

そして…ふっと近づいた！。

（え、え、え…）

藤城の唇が可奈子に近づく…

（え、キスされる…）

そう思つて可奈子は、咄嗟のことで目を つむり身を引いて固まつた。

急接近した二人の肌が触れるほんの数センチ前で、藤城は動きを止めた。

そして、さつと可奈子の口元をかわすと可奈子の耳元に唇を寄せた。そして、そつと呟いた…

「…君には何もしない…たとえ一緒にベッド入ろうと…」

キスされると思った可奈子は、そう言われて赤面する。しかし、何が起こったのかまだよくわからない…一体コイツは何を考えてるんだ…？

男は続ける。

「君は必ず僕の提案をのむさ。」

可奈子は、ドキリと心臓がなつた。

藤城は、サツと可奈子から離れると自分の荷物と伝票を持って立ち去つた。

「プロポーズしたんだ。今日は、僕が支払いますよ。」

とかなんとか、爽やかな笑顔を無駄に振り撒いて…

可奈子は、しばらく茫然自失でその場に固まっていた。

しかし…

ワナワナと怒りが込み上げてきた。

「なんなんだよーあいつわー！！！！ぜっーったい、結婚なんてするかー！！！！」

可奈子は、人目をはばからずキーキーわめいたので、周り是不審がった。

しばらくして周りの冷たい目線に気づき可奈子はハッとして、そそくさと店を後にした。

（くそっ…絶対結婚なんかするか…）

その頃、店をでて後方に可奈子の雄叫びを聞いた藤城は、ククッと笑いながら何処かへ電話をしていた。

藤城は、そのまま可奈子の会社に戻ることはなく、いつの間にかインターン生の名簿から名前が消えていた。

その日の晩、新しい日記にあらゆる不満を書き込み、誰がお前と結婚なんてするかと悪態を吐きながら可奈子は眠りについた。

次の日、可奈子のところへ一通の手紙が送られてくる。

白く、立派な封筒だ。手紙には可愛い小さな薔薇のシールがはつてある。

差出人を見ると、【藍田幸子】とある。幸子は、可奈子の高校時代の大親友だ。

学生の頃は、よく可奈子の実家である京都から幸子は、可奈子の一人暮らしのアパートによく遊びにきた。

二人とも昔から所謂コイバナなどから無縁で、ひたすらお互いの趣味の話や将来の夢や部活のことなどを話し合った。

可奈子が腐女子であることも知っていた。幸子は、腐女子ではなかったが漫画が好きで、よく同人誌を書いたりしていたので話はあった。

幸子は、同人誌では飽きたらず、自分でストーリーを設計しオリジナルの漫画を書くようになった。高校をでて、地元の京都で就職しその後も本格的に制作を続けていた。

幸子の描く漫画は、初めては異世界トリップやファンタジーだったが、就職をしたころから作風が変わっていった。

女の子なら誰もが憧れる、素敵な恋愛を描くようになった。そこにはイケメンの王子様やピンチの時にあわてふためく可愛いヒロインが登場した。

私は初め、幸子のそのようなベタな恋愛漫画を見て、とても意外に思った。

可奈子といるときはまったく恋愛の話もしないし、幸子に好きな人がいるなんて聞いたことがなかったからだ。

幸子は22歳の時に有名な少女漫画雑誌で、見事大賞を受賞した。今でもその雑誌では幸子の連載が途絶えたことはないというから、すごい人気だ。

私も大学をでて就職し、幸子は漫画の連載で忙しくなってしまう年々疎遠になってしまった。

そして、ここ1、2年は連絡をとっていなかった。（なんだろう？）

封筒を開く。

そこには、嬉しそうに微笑む幸子と優しそうにそんな幸子を見つめる男性が手を繋いだ写真、そして、そんな二人の結婚式の招待状が入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958s/>

DS大学生と腐女子OLの結婚日記

2011年5月14日12時01分発行